

越前の刀剣

●会場 1階 松平家史料展示室
●会期 平成27年3月11日～
平成27年5月10日

越前の刀工がつくった刀

関ヶ原の戦い（1600年）の後、初代福井藩主となった結城秀康が越前北庄（現・福井市中心部）にあらためて大規模な城と城下町の建設を行いました。これにともない、全国各地からすぐれた職人・芸術家がこの城下に集まりましたが、刀を製作する刀工たちも数多くみられたようです。江戸時代後期までに、刀に「越前住」等の銘を残す刀工だけでも200名あまりが知られています。これは江戸・大坂・京都に次いで、刀が重要産業であった美濃や肥前と並ぶ数です。これら越前の刀工がのこした刀は現在「越前新刀」と呼ばれており、これを代表するのは福井藩のみならず、徳川将軍家のお抱え工ともなって活躍した初代康継です。今回は特にこの康継と、彼が組織した大規模な刀工集団「下坂派」の作品を中心に、その名作といえる刀をご紹介します。



脇指 銘（葵紋）以南蠻鐵於武州江戸越前康継/本多飛騨守成重所持内（立葵紋）個人蔵 当館保管

鎌倉時代末期の名工、貞宗作の名物「梅竹貞宗」の初代康継による写し物。表裏にほどこされた梅と竹の見事な彫刻や刀身の寸法は、元の梅竹貞宗を忠実に再現し、刃文のみを康継得意の焼きの高いのたれに互の目交じりとするアレンジを加えている。彼は古名刀の写しの名手とされるが、全く忠実な写し物ではなく、このように独自の創意を加えた作品が多い。刃長38.4cm。

越前松平家伝来の刀

天下三名槍の一つ「御手杵」、名物「稲葉江」や「石田切込正宗」、天下五剣の一つ「童子切安綱」…親藩大名の筆頭として威勢を誇った越前松平家には、天下の名刀とのさまざまなめぐり合わせもありました。そのうち現在まで越前松平家に伝えられている刀剣から、名品の数々をご紹介します。



短刀 銘 行平作 越葵文庫 当館保管 刃長22.3cm

(彫刻部分拡大)
→



越前松平家伝来の一口。明治33年（1900）に越前松平家の家令・鈴木準道が当時同家に伝来していた主な重宝について記した『御重器見聞秘録』によると、もと四代藩主光通の所用で、刀剣の研磨や鑑定を家業とした本阿弥家で「越前家の大供利」と称した名物だという。「供利」とは刀身に欄間透かして彫られた「俱利伽羅」（龍が剣に巻きつき飲み込もうとしている図）をさしている。刀の長さに対して彫り物の大きさの占める割合が通常より大きいことから、「大供利」の名があるという。行平は平安時代末～鎌倉時代初期にかけて活躍した豊後国（現在の大分県）の刀工で、刀身に彫刻を行った最古の刀工。

日本刀について

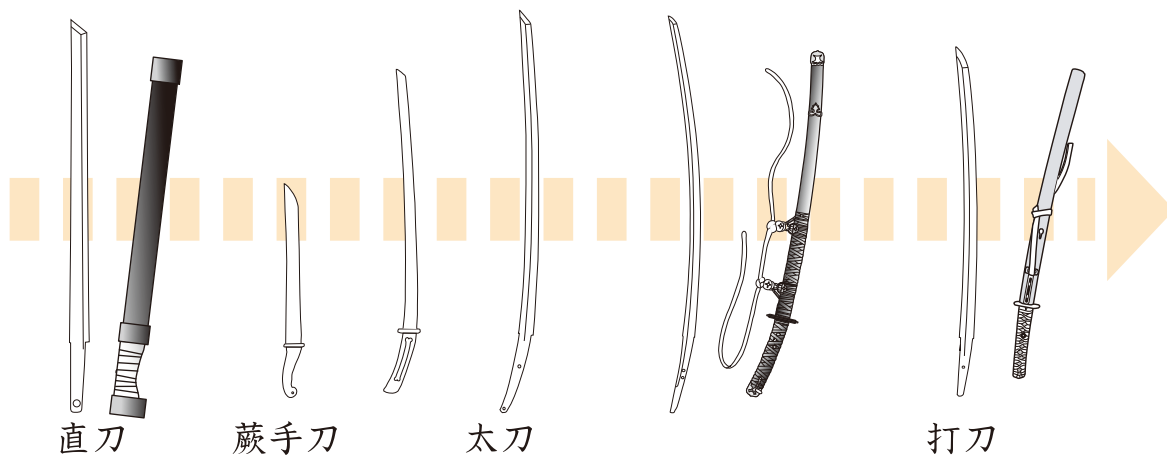
日本刀の形のうっりかわり

日本刀は我が国を代表する鉄の芸術として認知されていますが、そもそも古代にさかのぼると、そのルーツは朝鮮半島にあり、古墳時代の刀は反りのない、いわゆる「直刀」が一般的でした。

それが平安時代には日本刀独特の「反り」のついた「太刀」とよばれる優美な姿に変わります。関東・東北地方の蝦夷との戦乱がつづいたころ、蝦夷が使っていた「蕨手刀」という反りのある刀に影響を受け、馬上でのいくさにあわせた形状となったといわれています。

室町時代には、馬上より徒歩での戦いが主流になり、それにあわせて刀の長さが短くなるなどの形状の変化が起こります。腰から提げて身につける「太刀」と異なり、時代劇などでおなじみの、腰帯に差して使用する「打刀」の登場です。

このように、時代の変化に敏感に対応し、武器としての刀の形状もさまざまに変化しました。



日本刀の分類

日本刀には形や長さによって太刀、(打)刀、脇指、短刀といった種類があります。また広い意味では、槍やなぎなた、剣なども同様に日本固有の製法で作られたものとしてその範疇に入ります。

【太刀】 みなさんが美術館や博物館でご覧になる時、刃を下にして展示してあるのが太刀で、平安時代末期から室町時代初め頃まで、腰につるして用いたもの。反りがつよく、刃の部分の長さは通常65-75cmくらいある。



【(打)刀】 太刀にかわって室町時代中頃から主に用いられ、長さは太刀よりもやや短いものが多い。太刀とは逆に刃を上にして腰に指す。刀掛けに置く時も刃を上にして置く。もとは太刀として作られたものを、茎の部分を削って短くする(磨上という)ことにより刀として用いられたものもある。



【脇指】 刃の部分の長さが1尺(30.3cm)以上2尺未満のもので、刀と同じく腰に指す。桃山~江戸時代には「大小」といって刀と一組にして身につけた。

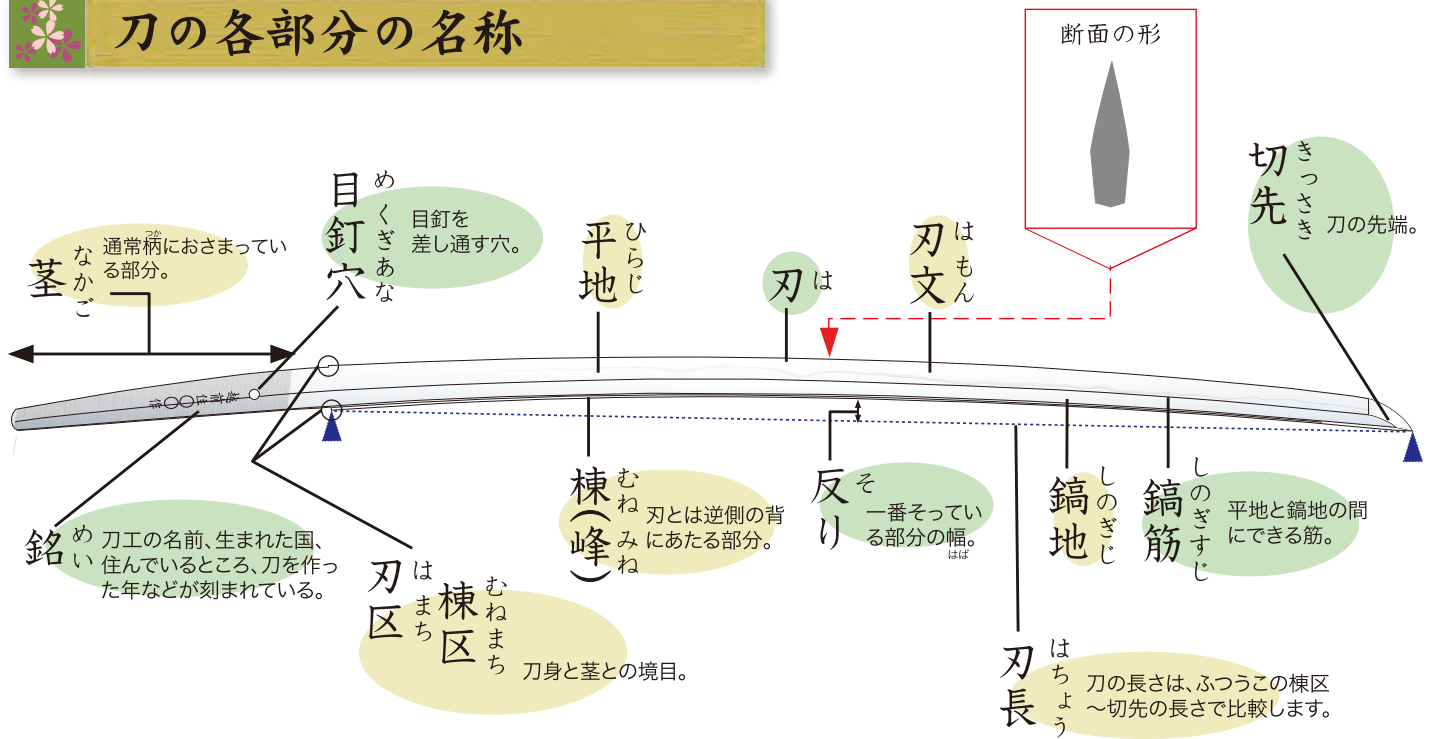


【短刀】 刃の長さが1尺未満のもので、「腰刀」とも呼ばれた。



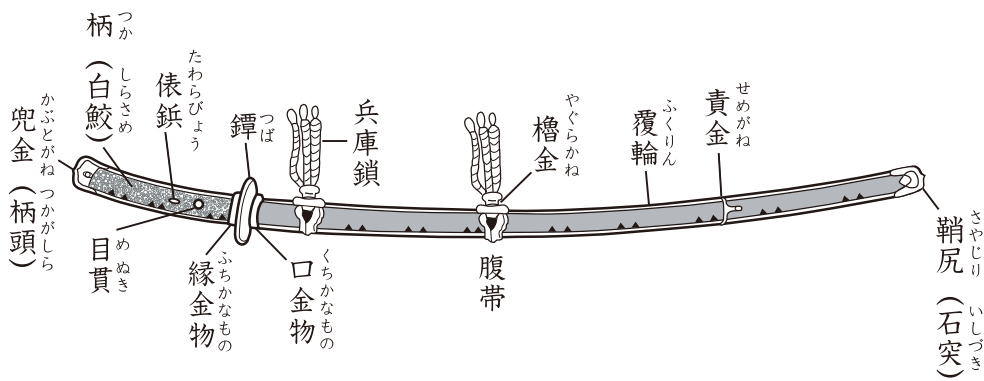


刀の各部分の名称

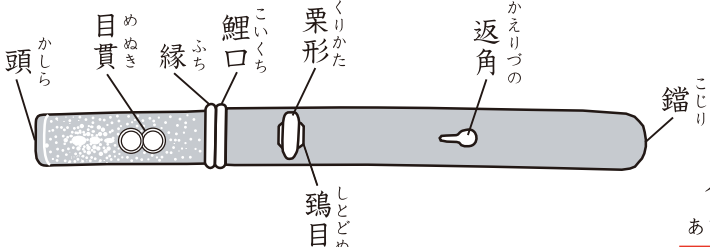
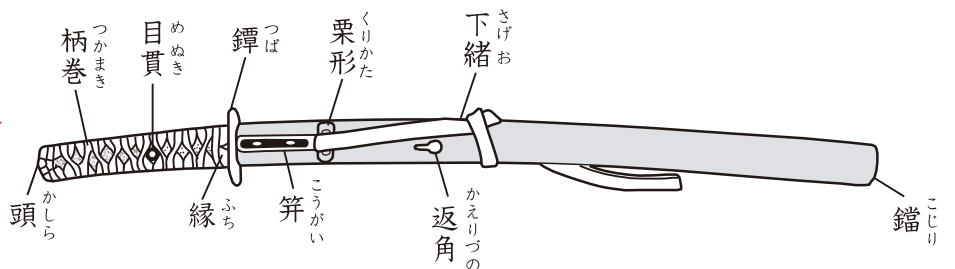


拵のいろいろ

刀身を柄と鞘に納め、鐔や装着用・補強用の諸金具を取り付け、刀の外装として仕上げられた一連のものを「拵」といいます。太刀や打刀、短刀などの拵は刀身の形状や身につける方法に合わせてつくられており、同様の部分でもそれぞれ別の呼称が使われるものもあります。



打刀拵
うちがたごしらえ



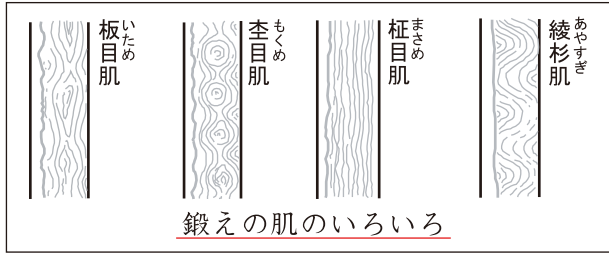
合口造短刀拵
あいくちづくりたんどうごしらえ

日本刀のみどころ

① 鍛え

日本刀は「折れず、曲がらず」という条件を満たすために、炭素量の少ない心鉄（＝軟らかい鉄）を炭素量の多い皮鉄（＝硬い鉄）で包むようにして鍛造します。皮鉄は良質の玉鋼を用い、熱して8～15回くらい叩き伸ばしては折り返して鍛錬されます。

「鍛え」とは地鉄のことで、鋼そのものの性質と、その鋼を折り返し鍛錬することによって刀の表面に現れて見える模様を総合したものをいいます。模様がはっきり出ているものを「肌立つ」といい、鍛え目が細く密着しているものを「肌がつむ」といいます。それらには大別して「板目肌」「杢目肌」「柂目肌」「綾杉肌」などがあります。ちょうど木材の板に見られる木目によく似ています。



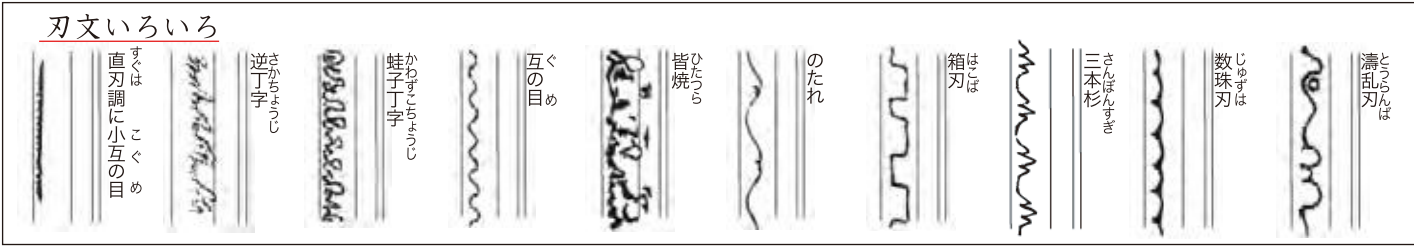
鍛えの肌のいろいろ

② 沸と匂

日本刀の工程の仕上げに近い段階で、任意の刃文にするため粘土で「土置き」し、熱した刀身を水で急冷する「焼入れ」を行います。このときマルテンサイトという組織が形成され、その集合が刃文として現れます。刃文の地と刃の境目などにひときわ明るく輝く粒子状の物が見られますが、肉眼で丸い粒状に見えるものを「沸」、夜空の天の川のようにぼうっと霞んで見えるものを「匂」と呼んでいます。

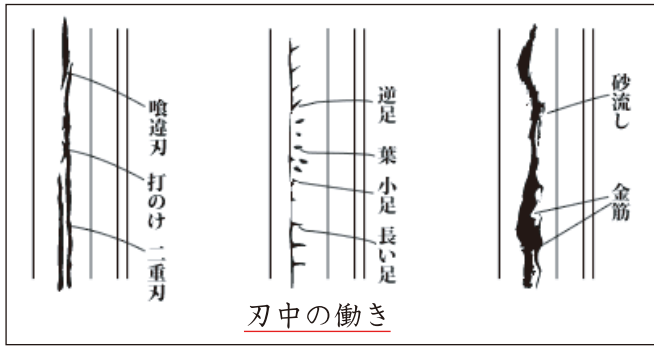
③ 刃文

刃文は焼入れの際に刀工が任意の模様になるよう、焼刃土という粘土を荒仕上げした刀身にへらを用いて薄く塗ることで、急冷した際に温度変化の違いが生じて現れる鉄の組織変化です。焼刃土の塗り方によって、直刃や乱れ刃などさまざまな刃文の形が決まります。刀工の技量や作風がはっきり現れる、やり直しがきかない重要な工程であり、結果生まれた刃文は刀の大きな見どころとなります。



④ 刃中の働き

「働き」とは地肌や刃文の中に見られる変化です。その形状によって足・逆足・葉・砂流し・打のけ・金筋などと表現します。例えば、刃文の中の沸が筋状につながって細い線となり、一層輝いてきらりと光って見えるものを金筋といい、同じようでもさらに太くて長い線のように見えるものを稲妻と呼びます。



刃中の働き

次回
『逸事史補』に見る松平春嶽と幕末維新の人々
平成27年5月13日(水)～6月28日(日)

展示解説シートNo.87 平成27年3月11日発行
福井市立郷土歴史博物館
福井市宝永3-12-1 電話 0776-21-0489
Fax 0776-21-1489
担当：松村 知也
展示協力・監修：勝山 捷容
印刷：リンクコーポレーション